

2020年11月29日（日）「御父の養いの確かさ」

マタイ 6:25-30

25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

26 空の鳥を見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりも優れた者ではないか。27 あなたがたのうちの誰が、思ひ煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。

28 なぜ、衣服のことで思ひ煩うのか。野の花がどのように育つのか、よく学びなさい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

#### 【序論】

今日は説教の後で、Hちゃんの献児式を執り行ないます。コロナ禍で明るいニュースが少ない中、このような恵みが私たちの教会に与えられたことを心から感謝しています。

Hちゃんは2020年2月23日にN家の長女として誕生されました。本来ならば、もう少し早く献児式が実施できることを期待していましたが、あいにくの状況により教会に人が集まれなくなり、9ヶ月という時を経てようやくこの日を迎えることができました。教会に子どもの声あまり聞こえないことは、まことに淋しいものです。久しぶりに赤ちゃんの声が聞こえるようになり、オンラインで礼拝に参加してくださっている方々からも、安堵のようなコメントをいただくようになりました。

さて、この献児式にどの聖書箇所から語ろうかと考えておりましたが、Hちゃんのお名前の由来となったマタイ6章の記事を選ばせていただきました。以前にマタイ福音書の講解説教の中で扱った箇所ではありますが、もう一度学び直し、この日のために備えました。献児式というのは、親が信仰をもって我が子を神のものとしてささげる時であり、その子の一生が神の御手の中で守られ育まれることを祈り求める時です。そこにはもちろん、親がその子に付けた名前がもたらす意味も関わってくるでしょう。聖書において名前とは、その人の本質を表します。今日の聖書箇所から、天地の造り主なる神様がHちゃんの人生をどのように導こうとしているかを聞き取っていきたいと思います。

## 【本論】

本論 1. 思い煩いの根源

だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。(6:25)

主イエスがこの教えを語られた文脈は山上の説教の中、そして聴衆は主イエスに付き従っていた弟子たちです。その弟子たちの中には、その日の糧にも窮するほど貧しい人々がおりました。現代日本ではそこまでの貧困を経験している人はあまりいないかもしれませんが、近年では「相対的貧困」という言葉が聞かれるようになってきました。「相対的貧困」とは、「平均的な人と比較した上での貧困」であり、それに対して「絶対的貧困」とは「衣食住に困るほどの所得しかない」ことを言います。今日の箇所では主イエスが語っておられる対象とは「絶対的貧困者」が該当してきますが、私たちもこの国が現代において抱えている問題との関わりを考えながら御言葉に耳を傾けたいと思います。

主イエスが「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ煩うな」と言われる背景には、物質的な意味でその日その日の生計を立てていくのがやっとならぬ人々が目の前にいたことを表しているでしょう。「食べ物」「飲み物」とは、まさしく生きていくための最も基本となる必要です。動植物は本能的にそのためだけに生きていくと言ってもよいでしょう。しかし、人間と決定的に異なる点があります。第一に、動植物は明日どうなるかといちいち思ひ煩わないということです。彼らはただ懸命にその日その日を生き抜いている。食べ物を蓄えるということを賢く行なっている動物もいますが、足りなくても「心配する」ということはありません。第二に、人間は「着る物」のことであれこれ考えますが、動物にはそもそも服を着る必要がありません。人間には「社会性」という側面がありますから、人前に入るにあたってある程度ふさわしい格好をする必要があります。これもまた、知恵が与えられた人間特有の「思ひ煩い」と言えるでしょう（私も若い頃は人にどう見られるかということであれこれ気にしていました）。このように考えていきますと、「思ひ煩い」というものの背後には少なくとも二つの事柄が隠れていることが分かってきます。一つは、将来を思ひ描くこと。もう一つは、人にどう見られているかを気にすることです。

「思ひ煩い」は「心配」と言い換えることもできますが、様々に解説されています。「関心を払いすぎる」「それによって取り乱した行動を起こすこと」「いろいろな部分に（心が）分裂すること」「心がぐらつくこと」「人生の主な目的から心が逸れてしまうこと」など。

「衣食住」とは人間の最も基本的な必要を表す言葉であると同時に、もう少し広く捉えると人生全般を表す言葉とも言えます。「絶対的貧困」を経験していない人にとって、人生における心配事は何かしらあるでしょう。日々必要な生活費に加え、特に将来必要となるものとしては、子どもの養育費や老後資金です。将来のことを考えれば考えるほど不安になるのが人の常。しかし、皮肉なことに心配したことのほとんどは実現しないとされます。それならば、脇目も振らずに労働に取り組んだ方が賢明でしょう。

## 本論2. 第一の例：空の鳥

主イエスは、弟子たち（すなわち、天の父なる神様の子とされた人々）がなぜ思い煩う必要がないかを、二つの例をもって説明されます。第一が「空の鳥」の例、第二が「野の花」の例です。

**空の鳥を見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりも優れた者ではないか。あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。(6:26-27)**

ここで言われていることは、こういうことです。空の鳥は蒔いたり刈り取ったり（農耕の業）に従事することはないが、どうにか食を得て生きている。その一生懸命な姿を見てごらん。怠惰でもなく、欲張りでもなく、将来に対して何の心配もしていない。自分が食べる分と、子孫を養う分を得るために一日飛び回っている。それでどうにか次世代に命をつないでいる。彼らの必要を満たしておられるのは神なのだ。神の御手の中であって一生懸命生きている、彼らはそれで十分なのだ。ましてや、あなたがたはその神を「父」と呼ぶようになった者たちではないか。あの鳥たちよりもはるかに価値があり、神から特別な寵愛を受けている存在ではないか。そのようなあなたがたを神が養われないということが果たしてあるだろうか。一羽の鳥にさえ目を留めておられる神が、ご自分を信じ、信仰によって生きようとしているあなたがたを放置されるなんてことがあるだろうか。いや、絶対にない。

主イエスはこのように、まず小さなものを例に挙げ、それよりも優れた存在を後から比較対照するという手法を度々使われます。ここで注目すべきことは、主イエスが「鳥たちの『天の父』」ではなく、「あなたがたの『天の父』」が養ってくださると言っておられることです。神は確かに万物を造られた父だ。しかし、神を「父」と呼び、人格的な交わりを持つことが許されているのは、ほかならぬあなたがたではないか。

主イエスは更に、人間が達成できることには限界があるということをも加えられます。

人の寿命とは、他の動植物の命と同じように神の御手の中にあり、定めの人に生まれ、定めの人に去って行く。誰もその命を自らの力で引き延ばすことはできないと。このことは、地上の命にのみ絶対的価値を見出す人々への警告として響いてまいります。もちろん、主イエスは地上の命が重要でないと言っておられるのではありません。25 節では「命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切」と語られていました。しかし、更に大切なことがある。それは、自分という全存在が神によって造られているということ。神の摂理の下にある存在であるという事実を認めること。私たちの人生にはまことに様々なことが起きてきますが、一切のことを「神からのもの」として受け止めていくとき、御手の中にある安心が与えられる。失敗や試練も含めて、私たちの人生は神のものなのです。

### 本論 3. 第二の例：野の花

もう一つの例を見てまいりましょう。

なぜ、衣服のことで思い煩うのか。野の花がどのように育つのか、よく学びなさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。(6:28-30)

先の「空の鳥」(動物)に対して、今度は「野の花」(植物)が例に挙げられます。「空の鳥」は「食べ物を得る存在」としての例でしたが、「野の花」は「ありのままの美しさ」の例として登場しました。語られる対象としては、特に外面を整えることに気を配る女性が念頭にあるのではないかとされています。ファッションは男性よりも女性の方がはるかに関心が高いでしょう。男性がスーツを着ればどうにかなるのに対し、女性の場合はそうはいきません。ある程度お金をかけなくてはならない部分です。しかし、主は身だしなみの大切さを重々理解しながら、そのことについても思い煩ってはいけなうと言われます。人目を気にしすぎて、人生の主な目的から心が逸れてしまてはならないと。

人目を気にするということは、何もファッションだけに限られる話ではありません。学歴や家柄、どんな車に乗っているか、インテリアといった「外面的なもの」すべてが含まれてくるでしょう。これらは「目に見える部分」であって、人の内面そのものを表すものではありません。しかし、人はそういうものに心を奪われやすいのです。

私は高校生の頃、都心の学校に通っておりましたので、ある種の格差を感じ、世間知

らずの自分が恥ずかしくなったことがありました。同級生でカラオケに行った際、周りの仲間たちの高価なファッションに衝撃を受けたものです。それ以来、自分の見てくれが非常に気になるようになりました。これは一種の病気だったとます。自分という存在そのものに自信がなかったため、見えるものすべてに振り回されていたのです。

主イエスは「野の花」の装いについて語っておられます。ここに登場する花は、おそらくパレスチナの平原の至る所に美しく咲き誇る野生のアモネアを指すであろうと言われています。この花は一日だけしか咲かないそうです。しかし、その限られた輝きを限られた時間で精一杯発揮する。その美しさは、自ら作り出すものではなく、神がお与えになっているものである。主は、豪壮なソロモン王の見てくれの美しさを引き合いに出していますが、彼が経済力によって身につけた如何なる装いも、この一輪の花に現れた神の摂理による輝きには到底及ばないと言っておられるのです。ここに、人がどのような「輝き」に心を留めるべきかの示唆が与えられています。それは、内面的な輝きであり、神との交わりを通して滲み出てくる品性のことなのです（I テモテ 2:9-10）。

今年も秋口に礼拝堂と牧師館の間の通路に彼岸花が咲きました。このオレンジ色の美しい花は、誰が管理するわけでもなく、毎年勝手に咲き誇ります。その命は一年間土の中に隠されたままですが、見えないところで逞しく生き続けており、時が来ると顔を出し、見る人々の心を楽しませてくれます。

### 【結論】

Hちゃんにも、神から来る美しさを全身で現す一生を送っていただきたいと願います。既に神の祝福の下に生まれてこられたHちゃんの人生を主が守り、生涯に亘って育み続けてくださいますように。そして、この神の守りの下にあって、どんな時にも思い煩うことなく、神の摂理を確信した人生を送ってくださるようにと祈ります。

また、この礼拝に参加しておられる一人ひとりが、同じ神を父とする者として、平安の内を歩むことができますように。神が私たちを格別に愛し、守り、養ってくださっていることを如何なる時にも忘れずに歩んでまいりましょう。

【祈り】

万物の養い主であられる天の父なる神様。私たち人間もまた、造られたもののひとつです。まことに小さき存在ではありますが、そのような私たちを愛し育ててくださっているあなたの御顔を拝します。私たちは主イエスにあってあなたを「父」と呼ぶことができるようになりました。あなたをどこしえまでも信頼して生きてまいります。そして、今日献児式にあずかるHちゃんの人生を主が豊かな恵みの下に置き、溢れんばかりの祝福で満たしてください。主イエスとの契約の下に誕生されたHちゃんが、生涯に亘ってあなたのものであり続けることができますように。そして、あなたご自身が与えてくださる内なる輝きをもって、多くの人に喜びをもたらす存在となることができるよう、お導きください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
万物を創造し、その聖き摂理によって歴史を導き給う、父なる神の愛、  
信じる者すべてを、御父の絶対的保護の下に導き入れ給う、主イエス・キリストの恵み、  
神につながるところの内なる輝きにより、暗き世を照らさせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、とりわけ今日献児式にあずかったHちゃんの上に、そのご家族  
の上に、  
限りなくあらんことを。